

天耳、神境、他心の四通に通達して居られたことは明白」と評した。これは「原始仏典」中の「沙門果経」が説くところの、修行の成果で得られる六つの能力を示したものである。先の四通に、宿明通、漏尽通を合わせて六通。

中村元監修の現代語訳「原始仏典 第1巻 長部経典 I」によれば、「天眼通」は高い建物の上から人々の往來を俯瞰するように生けるものたちがその行為に依じて転生するのを洞察し、「天耳通」は超人間的な天の耳によって、遠くであれ近くであれ、天と人間の両方の声を聞くことができ、「他心通」はその言葉通り、他の人々の心を熟知し洞察することができる。

「神境通」である。現われたり隠れたり、水上においてもまるで大地におけるがごとく沈むことなく行き、空中においてもまるで翼のあるがごとく足を組んだまま進む、という。

これをすれば、上人が行ったとされる神通力と見事に符合するのがわかる。原田は「神変記」の「小序」で、「通常科学知識の遠く及ばない世界が限りなくある」とし、上人による神変不思議の実例を見聞すれば、それを信じる事ができると説く。と、同時に「科学萬能論者の所有する知識は全く浅薄であり皮相である」と、実利主義と唯物論を徹底して批判し、学者も教育者も一般大衆も、果ては宗教家まで科学知識に合わないも

の何もかも信じなくなってしまうと、その時代性を嘆くのである。

メディア戦略

この原田の立ち位置は、1928（昭和3）年に仏教界に勃発した「正信論争」を知れば十分に納得できる。法蔵館刊「日本仏教と西洋世界」所収の吉永進一による論文「忽滑合快天」によると、「正信論争」は時代に依りて仏教を書き換えていくべきとする曹洞宗の学僧・忽滑合快天の論文に対して、修行と伝統を重視する原田が「獅子身中の毒虫」と罵倒したことにより、近代派と伝統派に分かれて大論争となるなど、近代的な仏教観が問われた事件だった。

忽滑合は「雑信は非科学的」として、仏教に内在する超常的なもの一切を批判し、「健全」「常識」「科学的」を主幹とする新仏教を掲げた。論争に決着がつかないまま、34年に忽滑合が急逝しており、「神変記」の刊行された35年当時も、まだその論争を引きずっていたことは容易に想像できる。これらを踏まえて考えると、原田が科学万能主義



宥明上人に大きな影響を受けた佐藤権兵衛の頌徳碑
＝山形市・山寺霊園

語り継がれる不思議な話

ではないだろうか。「神変記」とは原ディア戦略の一環と考えられるので、さて、ここで「実がある。「神変」が大橋についてだにおける最も時代述は、1924

を批判し、上人の神通力を無上菩提を信解行證する基本ともなり得るから誠に尊い」と絶賛するのは当然であり、上人の存在とその体験談は、世間一般に仏教の靈験功德を訴える模範例だったと言えるので、これは確か

大橋博吉著「高橋宥明上人神変記」（以下「神変記」）を開くとまず、「小序」と題した文章が目にとまる。これを書いたのは曹洞宗の老師として知られ、曹洞宗大学林（現駒沢大）でも教鞭を取った原田祖岳だった。陸軍大佐・大橋博吉が何故にこの本を書くことになったのか。その発端は大橋が原田の下で参禅していたことに起因する。

原田が不思議な話をしても全く疑う様子がない大橋に対して、その疑問を向けると「神怪な事をなす和尚」と一所に居て、時に神變不可思議なる事を見せて呉れましたから」と返ってきたという。それで宥明上人を知った原田が、思い出した時にその不可思議な事を書いておくが良いと大橋に説いたことがきっかけとなり、本書が出版されるに至ったようである。



宥明上人の子孫に当たる高橋家では、先祖の遺影と並んで上人の写真が掲げられていた



高橋家の墓の横には宥明上人の石碑も立っている
＝上市市・寿仙寺

物事にやたらと白黒をつけたがる 昨今にあって、上人の神通力は それを笑い飛ばすような荒唐無稽さが魅力だ。

原田が「小序」で「これは現代かかる通が一人出現せんむ」との言葉通り出会いから神通力望し、宗教者へと物がいた。大橋にいた佐藤権兵衛で没後、その功績940（昭和15）れた頌徳碑が山寺霊園にある。碑文僧問靈界妙理有所思議な僧侶に会つ深き道理を悟つたらに仙術を修める山や葉山にこもっている。

「ここで言つ不思議は宥明上人に間違歳の時に上人に出重篤な病を祈禱に